

近代住友の経営理念と宗教的基盤

——キリスト教と陽明学を中心に——

瀬岡 誠

はじめに

拙著『近代住友の経営理念——企業者史的アプローチ——』¹⁾では、企業者史的なパースペクティブに基づき、近代住友の経営理念の生成と発展（さらには変質）のプロセスの歴史的・社会学的分析が試みられた。同書では、広瀬幸平、伊庭貞剛、鈴木馬左也、小倉正恒という近代住友の発展の基礎を築いた経営者のライフ・ドキュメントが実証的に分析され、彼らの経営者としての理念のみならず、その時代を生きた歴史的主体としてその人間像が可能な限り明らかにされた。また、「近代住友の経営者と所有者の思想と行動がこれまで想定されてきた以上に奥行きと幅をも

ち、歴史的な重みを有する」という認識のもとに、彼らの思想と行動のもつ意味（および限界）が、社会的基盤（重要な他者）、「準拠集団」および「関係者や関係集団」、逸脱、革新、マージナリティ、マージナル・マン、準拠集団などの企業者史における主要な分析概念を駆使することにより明らかにされた。すなわち住友の経営者や所有者の伝記や日記などのライフ・ドキュメントを企業者史的な視点から徹底的に分析することにより、彼らのライフ・ヒストリーが独自のパースペクティブにおいて再構成、再解釈されたのである。

伊庭、鈴木、小倉の企業者史的分析を通じてもつとも重要と考えられるのは、まず第一に彼らの「出自」というこ

とである。彼らはすべて武士階級出身で、しかも、異常なまでの強烈な修養意識と国事意識をもった経営者であったという事実である。伊庭は弘化四（一八四七）年に近江国蒲生郡西宿（現、滋賀県近江八幡市西宿町）に代官伊庭正人貞隆の長男として生まれた。鈴木は文久元年（一八六一）日向国児湯郡高鍋横筏に家老水筑種節の四男として出生した。鈴木は祖父鈴木百助は高鍋藩総奉行であった。また、小倉は明治八（一八七五）年、石川県金沢市大衆免に旧加賀藩士小倉正路（のち裁判官）の長男として出生した。

さらに彼らに共通している事実として注目すべきは、伝統的エリート（武士階級）出身者として一度は官界に身を置いたにもかかわらず、その後実業界に転身（住友入り）しているということである。伊庭は大阪上等裁判所判事を辞すまでの十年間（明治元年～十一年）、鈴木は書記官（愛媛県・大阪府）や農商務省参事官としておよそ七年間（明治二十二年～二十九年）、小倉は内務官僚や参事官（山口県）としておよそ二年間（明治三十年～三十二年）、それぞれ国家官僚として務めているのである。

以上の点に関連してより重要なことは、武士出身者として武士道精神を教え込まれてきた彼らが、明治維新によつ

て身分制階級社会の消滅（ヘーゲンのいう「地位尊重の撤回」）を経験することにより、「アイデンティティ喪失の危機」⁽³⁾に直面したということである。その結果、彼らは持続的な心理的葛藤や緊張・不安にさらされ、典型的なマージナル・マンとして生きざるをえなかった。もちろん、ここで筆者は、近代住友の経営者だけがそうしたマージナル・シチュエーションにおかれたなどと主張しているのではない。そうではなくて、一般的に旧武士層、とくに薩長藩閥からそれた旧武士やその子弟は、程度の差こそあれ、マージナル・マンであったということである。これを企業者史的パースペクティブからいえば、マージナル・マンとしての彼らは、状況次第では創造的・革新的な企業者（人間）活動を遂行しうる高い可能性を内包していた、ということになる。⁽⁴⁾

さて、「アイデンティティ喪失の危機」に直面した旧武士層やその子弟が自我崩壊の危機を克服する手がかりのひとつとしてあらためて見いだしたのが、武士道であった。つまり、明治維新によって土農工商という厳格な身分制度は終わりを告げたが、その制度を支えた精神的基盤の重要な構成要素のひとつであった武士道は、旧武士やその子弟

の思想と行動に大きな影響を与え続けたのである。新渡戸稲造はその著『武士道』（明治三十二年初版発行）の第一章「道徳体系としての武士道」において次のように述べている。⁽⁵⁾

それ（武士道——筆者注）は今なお我々の間における力と美との活ける対象である。それはなんら手に触れうべき形態を取らないけれども、それにもかかわらず道徳的雰囲気香らせ、我々をして今なおその力強き支配のもとにあるを自覚せしめる。それを生みかつ育てた社会状態は消え失せて既に久しい。しかし昔あつて今はあらゆる遠き星がなお我々の上にその光を投げているように、封建制度の子たる武士道の光はその母たる制度の死にし後にも生き残つて、今なお我々の道徳の道を照らしている。

彼らがそれまで武士やその子弟として習得してきた「武士道精神」や儒学（朱子学や陽明学）の素養は、幕藩体制の瓦解と同時に消滅したのではない。そうした精神ないし思想は、彼らの意識と行動を大きく規定する原理として存在し続けたのである。近代住友の経営者の理念を分析する場合、このような視点を切り捨ててしまうと、彼らの意識

や行動のもつ複合性や重層性を剔出しそれを企業者史的な視座構造に基づき実証的に分析することは無意味となつてしまふだろう。本稿第二章において、「住友人と陽明学」がとりあげられる理由はまさにこの点にある。

明治維新時二十二歳であつた伊庭は、準拠人で国学の師西川吉輔の招きにより上洛し、京都御所禁衛隊に入つてゐる。伊庭の場合は、国家存亡の危機としての幕末維新期を体験したという事実が重要である。伊庭の思考方法は維新を境に「藩」から「日本」（日本人）へと拡大した。このことは彼の経営理念が端的に示している。⁽⁶⁾

鈴木は維新時八歳で、漢学を学び始めているが、この年、勤王のことに座した長兄水筑弦太郎の死に直面している。また、明治十年の西南の役では父種節が反乱軍に捕らえられ獄死している。鈴木の場合、長兄と父の死が、ともに「国事」に関連していたという事実は、彼自身の国事意識の高さと決して無関係ではない。

他方、小倉は旧武士層の子弟として維新後の明治八年に生まれたが、母井義雄によれば、小倉は祖父小倉永政から武士道精神を教え込まれたという。さらに、「祖母と子守女の影響を強く受けた」と回想している。その女性立派

な、賢夫人で、先祖の祭祀や報恩の精神やものごとの善悪について、日常生活のなかで教えられたと語ったという。⁷⁾

小倉の場合は、新政府が未だ安定しない時期（明治七年に江藤新平による佐賀の乱、同九年に熊本神風連の乱、同十年に西南の役、同十一年には大久保利通の暗殺がおこっている）に少年時代を過ごしているということ、そしてその多感な少年時代に武士道の生き証人たる祖父に身近に接し、その精神を学ぶことができたということ、この点が重要である。

小倉は参禅や剣や心学による自己鍛錬に加えて、修養団運動や禊行への没入にみられるように、きわめて高い修養意識をもっていた。この小倉の経営理念の中核は宮本又次が強調しているように「まこと」の実践⁸⁾ということであつたが、これは武士道が忠義や礼ともにもつとも重んじられる徳である。

さて、武士道精神を内面化した彼らが、マージナル・マ⁹⁾ンに固有の激しい内面的葛藤を「昇華」し、創造的・革新的な経営者となるために何を必要としたのであろうか。この点に関して筆者がもつとも注目しているのは、彼らはみな禅という宗教に大きな関心を抱き、「自己鍛錬による主体性の確立」（安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』昭和四十

九年）をめざして生涯を通じて修業に励んだということである。伊庭は臨済禅に傾倒し、天竜寺管長滴水宜牧や橋本峨山を生涯崇敬した。鈴木はその東大時代から鎌倉円覚寺の今北洪川に禅を、山岡鉄舟から劍禅一如の精神を学んだ。小倉も鉄舟門下の小南易知や香川善次郎に無刀流を学び、河村善益邸や鈴木馬左也邸での接心会に出席し禅の修業を始めた。

本稿では、彼らが禅の修業による「主体性の確立」に加えて、当時の武士階級出身者として身につけていた儒学の素養、とくに陽明学の精神にも焦点をあてて、それが彼らの意識と行動に与えた影響を論じたい。さらに、内村鑑三の弟子で無教会主義キリスト者であつた黒崎幸吉、江原万里、矢内原忠雄の住友入りの背景にも触れてみたい。彼らの住友人としての生活は決して長くはないが、内村門下生のなかでも卓越したキリスト者であつた彼らが、一時鈴木馬左也のもとで働いたという事実は、近代住友の経営理念が通常想定されているほど狭隘で排他的なものではなく、内村の無教会主義キリスト教の思想にも「共鳴盤」をもつものであつたことを示している。以下ではまず、住友におけるキリスト者について述べることにする。

第一章 無教会主義キリスト者と住友

(1) 鈴木馬左也のキリスト教観

明治三十七年七月、伊庭貞剛にかわつて鈴木馬左也が総理事に就任した。住友では、この鈴木を中心として、四阪島煙害問題に取り組んだ。明治四十三年に付近農民に対する煙害賠償契約を成立させる一方、亜硫酸ガスの科学的処理方法を見いだすため社運をかけて研究に邁進させた。その結果、ついに昭和十四年、総理事小倉正恒の時代になつて亜硫酸ガス中和工場が完成、煙害問題を根本的に解決するにいたつたのである。

飯島伸子が「発生源企業のみずからの産業廃棄物を率先して無害化しようとした例」⁽⁹⁾として日立銅山経営者の日立鉱業所とともに住友を評価しているのは、まさにこの長い年月を掛けての煙害の根本的解決にかける住友の企業行動に對してである。飯島は「環境社会学」の立場から、住友が「日本の環境問題史では希有な、自社努力によつて環境問題を解決しようとした企業」⁽¹⁰⁾であることに注目し、そのような前向きへの対応を可能にした理由として、「マックス・ウェーバーの『天職義務』のエートスを身に付けた、企

業内の特定の個人がはたした役割」と「有能な個人が力量を発揮できる（企業）規模」の二点を強調している。⁽¹¹⁾

ところで、ウェーバーによればこの「天職義務」のエートスは、歴史的には禁欲的プロテスタンティズムの宗教意識、すなわち「長期間にわたる宗教教育」から生まれたのであるが、伊庭貞剛をはじめとして、そのあとをついだ鈴木馬左也や小倉正恒がキリスト教から決定的に大きな影響を受けていたという証拠を見いだすことは困難である。

たとえば、鈴木馬左也は柴垣前定に宛てた手紙のなかで「小生ハ禅学ニテ大道ヲ研究シ実践セントスルモノニ候得共真理ハ唯一ニ付何レヨリスルモ同ジ事ト存候。宗旨相違ナリトモ又共同尽力ヲ要スルの有益ナル事モ可有之ト存候事ニ御座候」⁽¹²⁾と書いているように、彼自身は禅による真理への到達をめざしたが、他の宗教を排他的に忌避するという態度はとらなかつた。鈴木は次兄黒水長平や三好退蔵（長兄弦太郎の盟友）などのキリスト者の影響もあり、キリスト教を否定することはなかつた。学習院教授から秋月左都夫（鈴木馬左也の実兄、外交官）の推薦で住友に入り、別子鉱業所支配人を経て住友総本店理事となつた久保無二雄や、家長住友友純の命により本店副支配人を休職、第

一次西園寺内閣の間、総理大臣秘書官をつとめた山下芳太郎⁽¹⁵⁾も、キリスト者であった。⁽¹⁶⁾久保も山下も、家長友純の初めての欧米漫遊（明治三十年四月九日〜十一月十三日）途上、それぞれ留學生、領事館員として一時行動をとみにしている。その後兩名とも住友入りを果たし、しかも兩名ともキリスト者であったことは、注目に値する。さらに、キリスト者久保無二雄に対する友純の信任は厚く、遺言状には継嗣厚（第十六代住友吉左衛門友成）の訓育・補導にあたる人物として久保無二雄を最も適任とすると書いた。⁽¹⁷⁾

さて、『鈴木馬左也』によると、上述した柴垣前定への書簡は鈴木が「他の宗教に対して排他的の偏見を持たず、ともに真理を求める道として共感同情していたこと」⁽¹⁸⁾を知りうるとしている。草鹿丁卯次郎によれば、鈴木自身は禅による自己修養につとめたが、「人に依つて適する処と、適せざる処とあるが故に、各人の器量に依つて、或は禅道により、或は儒教に依り、或は又耶穌教によつて修養するも可なり」⁽¹⁹⁾と述べたという。つまり、鈴木最大の関心は、その人物が求道的精神をもつかどうかという点にあったといえよう。

内村鑑三の愛弟子江原万里の住友入りに際し、江原にキ

リスト教の欠点をきかれた鈴木は、キリスト教は「余りに個性を主張し過ぎて遂に国家を忘れるに至ることである」⁽²⁰⁾と答えたといわれるが、人材養成に関心があつた鈴木は、江原やその義兄黒崎幸吉などの卓越したキリスト者が住友人になることを拒まなかつた。有為の人材は積極的に採用し、国家的見地からこれを育成しようとした。事実、黒崎は大正元年八月、家長住友友純の長男寛一の「付き人」に採用されているのである。⁽²¹⁾

(2)住友における内村鑑三の弟子たち

①柏会 無教会主義キリスト者内村鑑三の愛弟子であつた黒崎幸吉、江原万里、矢内原忠雄の三名が住友入りをしている事実は、近代住友の経営理念を分析する上で無視することはできない。彼らは内村を師と仰ぐ集団「柏会」のメンバーでもあつた。「柏会」とは一高校長新渡戸稻造の感化によつて生まれてきた一高生や東大生の「読書会」のメンバーが、黒木三次の仲介によつて内村鑑三に師事することによつてできた「信仰的集団」⁽²²⁾である。第一回の会合は明治四十二年十月に開かれていた。⁽²³⁾黒崎幸吉はこのとき入会している。

矢内原忠雄が入会した頃の柏会のメンバーには、江原万里（のち伝道者）、黒崎幸吉（伝道者）、塚本虎二（伝道者）、藤井武（伝道者）、前田多門（文部大臣）、森戸辰男（文部大臣）、三谷隆正（二高教授）、川西実三（東京府知事・日赤社長）、高木八尺（東大教授）、鶴見祐輔（作家）らがいいた。

いずれものちに各界で大きな足跡を残す人々であり、矢内原伊作によれば、「内村山脈」として日本の近代思想上きわめて重要な意味をもつ集団であった。²⁵これらの人々は、内村の無教会主義キリスト教の信仰とそれに裏打ちされた彼の人格から、強い影響を受けていた。

②矢内原忠雄と内村系準拠集団 矢内原忠雄（明治二十六年〓昭和三十六年、のち東大総長）は、明治二十六年一月に医者矢内原憲一を父として愛媛県愛知郡富田村に生まれた。父憲一は、「地方切っつの最初の西洋医者」であったという。忠雄はのちに父憲一が「儒学の感化を受けた人」と見えまして、人は誠実でなければならぬこと、正直でなければならぬことを毎日のやうに私共子供に言いつて聞かせました²⁶と書いている。矢内原は一高時代から内村鑑三、新渡戸稲造の感化を強く受けた。彼がはじめて内村の聖書研究会に出席したのは、一高二年生の明治四十四年十

月一日、日曜日のことであった。矢内原はのちに「その日から、先生と私との直接的な師弟の途が開けた。それは私の生涯について、決定的な日であった。おごそかな、また幸福な日であった²⁷」と書いている。それから二か月後の明治四十四年十二月二日、矢内原は「柏会」に入会する²⁸。大正六年、東京帝国大学法科大学卒業後、同年四月住友総本店入社、住友別子鉱業所に大正九年三月まで勤務した。

③黒崎幸吉 黒崎幸吉（明治十九年〓昭和四十五年）は明治十九年に旧庄内藩士黒崎与八郎（号研堂）の長子として山形県鶴岡町（現鶴岡市）に生まれた。第一高等学校を経て、明治四十年に東京帝国大学法科大学政治学科に入学、二年後の明治四十二年十月、柏会の誕生とともに同会に入会、内村鑑三の門に入った。明治四十四年、東京大学法科大学卒業後大阪の住友総本店（経理課主計係）入社、この頃、プリマス兄弟団の伝道者松本勇治らとの交流があった。大正元年八月、総本店経理課にいた黒崎の「為人^{ひととなり}」が見込まれて家長住友友純の長男寛一の付き人に任ぜられている。大正四年五月から一年間、住友寛一に随ってアメリカに住んだ。翌五年五月に帰国、大正六年十二月からは新居浜の住友別子鉱業所に勤務し、自宅において聖書研究会を

開いた。⁽³⁰⁾ここで注目すべきは、「麻布区市兵衛町一ノ三住友寛一」の名前が「柏木教友名簿」(大正六年)に記載されているということである。さらに、寛一と同じ住所を記載した「住友家庸員」として「大久保久三」という名が見える。大久保久三は、元住友銀行参事で、大正五年から七年まで東京の住友寛一のもとで彼に仕えた。寛一のアメリカ行きには、黒崎とともに随行した。大久保の父は明治三十七年頃住友家の茶臼山別邸に起居して家長友純の妻に華道を教えていたという。⁽³²⁾大久保も無教会主義キリスト者であり、黒崎が関西地方での伝道を始めた昭和五年頃、当時住友銀行に勤務していた大久保の家において「無教會的集会」が開かれた。⁽³³⁾

『住友春翠』には、「寛一は心身が強健でないのみでなく、繊細鋭敏な資質は芸術宗教などに多く心を向け、事業には興味を持たないものやうであった⁽³⁴⁾」とある。寛一自身は宗教に関心があつたこと、付き人の黒崎が無教会主義キリスト者であつたことなどから、柏木教友会に入会したものと考えられる。付き人黒崎幸吉の寛一に対する人格的影響力の大きさを示す事実として注目したい。寛一を後継者とすることを断念した家長友純は、「重役会議」にも

図つたすえ、大正五年十月三日、寛一の「推定家督相続人廃除」を決定した。⁽³⁵⁾したがって、この名簿が作成された大正六年当時には寛一はすでに廃嫡されていたわけである。⁽³⁷⁾なお、同名簿には、黒崎幸吉、矢内原忠雄をはじめ、藤井武、塚本虎二、高木八尺など「柏会」のメンバーの多くが名を連ねている。

ところで、鈴木馬左也は禅の修業のみならず、明治十七年頃から鉄舟山岡鉄太郎に無刀流を学んでおり、鉄舟亡きあとはその高弟で無刀流第二代の香川善次郎についた。小倉正恒の劍の師は無刀流三代石川龍三であつた。⁽³⁸⁾一高時代に劍道部員であつた黒崎は、住友入社後「山岡流の先生で鉄舟の直弟子である人」から組立ちを習つたという。そのときのことを次のように回想し、山岡鉄舟の無刀流と無教会主義キリスト教の類似点に関して興味深い指摘をしている。⁽³⁹⁾

それ(組立ち——筆者注)が私に非常に興味を起させたのは、その間の抜けた動作の中に含まれたある心の動きであつた。そして劍道の窮極も結局心の問題である以上、そこに形以上のものの把握が重要であることを示すものであることと理解したのであつた。

——先生はそういつて教えたわけではない。

これが今日私のキリスト教信仰のあり方に非常に類似しており、形式に非ず内容を重視する無教会主義に落ちつくまで、私の心が安きを得なかつたのと一脈相通ずるものがあり……（以下略）

これは、鈴木と無教会主義キリスト者との思想的共鳴盤の存在を示すものとして貴重である。

さて、矢内原が別子鉱業所経理課に入った大正六年当時、黒崎は同課の課長であつた。黒崎のもとで働きたいというのが矢内原の別子勤務希望の理由のひとつであつた。

矢内原にとつて住友入りは、「帰郷」、「朝鮮での伝道」に次ぐ三番目の選択肢であつた。彼は「就職について」（大正五年十月九日付）という一文のなかで住友を選んだ理由として「格別住友に行きたくてたまらぬ事はないが鈴木馬左也氏は土を待つに礼ある人だといふ事、黒崎「幸吉」、江原「万里」、松本三兄の既に在らるる事、煙害問題以来故郷に係深きこと」などをあげている。また、矢内原は入社試験の際、試験官の久保無二雄（当時別子鉱業所長）に、別子に行きたい理由として、先輩の黒崎幸吉（当時別子鉱業所経理課長）が住友入りを勧めてくれたことをあげ

ている⁽⁴⁾。さらに、矢内原が大学卒業の直前（大正六年）に江原万里に宛てた次の手紙は、矢内原の住友入りが、尊敬する江原と黒崎がすでに住友人であつたことに起因することを示している。

小生は決して住友なぞへ行くものには候はず。小生はわが愛する憐むべき同胞の中へ行くものに候、小生実業界には眼もなく腕もなく抱負もなく趣味も無し、況して住友の如きは眼鏡にかかれる一塵のみ、小生は聖書を持ちて我民の中に入るといふ意識のみ明瞭に候。

（中略）小生住友へ行くと思ひても何等の愉快起らず、唯貴兄の許へ行くと思へば実にうれしく候。「君は住友へ行くさうだね」と言はれてしかみ面致す小生も「君は江原君の処へ行くさうだね」と言わるる時は笑顔を致居候。住友家を助けに行くやら貴兄を助けに行くやら一寸わからず候。小生或は新居浜行きと相成るやも知れず、その時は黒崎兄を助けに行くこととなる故いづれにしても喜び居り候

ここに、内村を師と仰ぐ信仰集団「相会」を中心とした準拠集団機能をみる事ができる。なお、江原万里は住友入社後、黒崎幸吉の妹祝と結婚している。また江原の娘錫

子は矢内原忠雄の長男伊作と結婚した。矢内原忠雄の最初の妻西永愛子は、柏会のメンバーで官吏を辞し独立伝道者として活躍する藤井武の妻西永喬子の妹である。これも準拠集団行動のひとつであり、かれらキリスト者たちの連帯性の高さを示しているといえよう。

黒崎は住友製鋼所副支配人をつとめたあと、大正十年一月妻の急死を契機として住友を退社、伝道を志すことを決意した。⁽⁴⁴⁾ ついに「天職」を見いだした黒崎は、同年二月上京し、畔上賢造とともに内村鑑三の助手をつとめたあと、同十一年九月渡欧、二年五か月余りの留学を終え帰国後は、無教会主義運動の伝道者として活躍する。

④江原万里 矢内原の二年先輩であった江原万里（明治二十三年～昭和八年）は、明治二十三年旧津山藩の江原晴次郎の長男として岡山県津山に生まれた。⁽⁴⁵⁾ 明治四十一年七月、第一高等学校入学、同級の高木八尺とともに内村鑑三の門下となり、無教会主義キリスト教の信仰を学ぶ。一高卒業後東京帝国大学法科大学政治学科に入学、内村を師と仰ぐ「柏会」に加わった。大正四年東大卒業後、同年八月住友総本店に入社、川田順の部下として経理課主計係を命じられた。住友入りに際して、江原は、まず東大教授矢作

栄蔵⁽⁴⁶⁾の勧めで上京中の湯川寛吉に面会、「実業界に対する偏見を打破する」ほどの感銘を受けたという。また大阪で当時の総理事鈴木馬左也に面会したとき、彼の「恭謙」な行為を目の当たりにして、「私は其の瞬間美事に彼の捕虜となつた⁽⁴⁷⁾」と述べている。禅により鍛え上げた鈴木馬左也の人格（「誠実」）が、実業家にはなるまいと決心していたキリスト者に住友入りを決意させた要因のひとつであった。⁽⁴⁸⁾ 江原は大正十年九月に総本店を退職するまでおよそ六年間、住友に勤務した。その間、大正九年一月には大阪北港株式会社設立業務に参画し、同社庶務係主任としてその創業に尽力した。住友退社後、河合栄治郎の紹介で東大⁽⁴⁹⁾経済学部助教教授をつとめるが、病気のため昭和四年東大を退官、そののちは無教会主義キリスト教伝道者として、『聖書之真理』（昭和二年十一月創刊の『思想と生活』を改題）を発行、当時起こりつつあった軍国主義の危険性を訴えて講演活動をおこなつた。⁽⁵⁰⁾

以上、黒崎、江原、矢内原という卓越した無教会主義キリスト者の住友入りの背景を分析することにより、近代住友の経営者の思想的体質の一部分が明らかにされた。この分析手法は「周縁」から「中心」を照射するという「逆照

射の方法」⁽⁵¹⁾に基づいている。次章では、近代住友の経営者たちが禅のみならず王陽明の思想からも大きな影響を受けていることを論じたい。

第二章 住友人と陽明学

(1) 禅と陽明学

小倉正恒が、中江藤樹の「陽明学は禅に近いもの」と言明しているように、もともと武士階級出身者として儒学の素養を身につけていた近代住友の経営者が、陽明学的精神のなかに禅を、禅のなかに陽明学的精神を見いだすのはさして困難ではなかったと思われる。

荒木見悟によると、「心に第一義の重心をおく学問乃至体験」を「心学」と定義するならば、禅も陽明学もともに「心学」であるといえる。⁽⁵²⁾ また、吉田公平によれば、陽明学とは、性善説を人間観の核心にすえて「修己（個人の人格的充実）」と治人（政治的成果）を二焦点とする楕円形の思惟構造をもつ⁽⁵³⁾ という。つまり、陽明学では、禅のように個人的安心（悟り）のみを追求するのではなく、公の世界における社会的政治的責任をも積極的に担い、理想社会の実現をめざして行動することが要求されるのである。⁽⁵⁴⁾ 伊

庭貞剛をはじめ、鈴木馬左也、小倉正恒などの近代住友の経営者の経営理念に特徴的な「国事意識」の高さは、彼らが武士出身のマージナル・マンとしてこのような陽明学的精神に共鳴盤を有していたことと決して無関係ではない。

(2) 伊庭貞剛

伊庭貞剛は、代官伊庭正人貞隆の長男として、弘化四年に近江国蒲生郡西宿に生まれた。伊庭は青年時代には剣を学ぶかたわら、熱烈な勤王主義者西川吉輔に師事して国学をおさめた。壮年時代には、王陽明の思想に親しみ、とくに大塩平八郎の『洗心洞割記』は繰り返し繰り返し読んでいた。江州石山に隠棲後も書齋には大塩平八郎の書が掲げられていたといわれる。⁽⁵⁵⁾

伊庭は、別子煙害問題の早期解決のために無人島四阪島への製錬所移転という、当時の財閥経営者としてはきわめて逸脱的な意思決定を断行した。広瀬幸平は伊庭のこの決断に強力に反対したし、家長住友友純の手紙は彼が広瀬と伊庭の間に立つて苦慮していたことを示している。⁽⁵⁶⁾ 革新的意思決定につねに伴うそうした反対にもかかわらず、伊庭は移転事業を断行した。伊庭は陽明学の根本思想である

「心即理」に基づき、「自己の本心」にしたがって主体的に生きようとしたのである。これは伊庭にとつてはむしろ当然のことであつた。なぜなら、彼は、江戸後期の陽明学者大塩中斎が天保七年の大飢饉にさいして体現した「知行合一」の精神、その激しい実践主義に共鳴していたからである。なお、伊庭の実践主義は彼の総理事辞任においてもとも明確に見いだされる。伊庭は明治三十七年二月に「実業之日本」に「少壮と老成」と題する感想を寄稿し、老人の経験と少壮者の「敢為果鋭の気力」の調和を説きながらも、「事業の進歩発達に最も害をするものは、青年の過失ではなくて、老人の跋扈である」と明言した。⁽⁵⁹⁾伊庭が総理事を辞任して近江石山に移り住んだのは、それから五か月後の明治三十七年七月のことであつた。

(3) 鈴木馬左也

伊庭貞剛のみならず、鈴木馬左也も陽明学から大きな影響を受けていた。鈴木馬左也の心友で小倉正恒の義父となる河村善益によれば、鈴木は東京大学予備門に入學した頃から、「経済ノ方面デ、即チ大ニ産業ヲ振興シ商工業ヲ発達セシメテ、邦家ノ為ニ尽シ度イトノ志ガアツテ、此ノ方

面ノ先覚タルカノ熊沢蕃山先生ニ私淑シテ」いたという。⁽⁶⁰⁾熊沢蕃山（一六一九—一六九一）は、日本における陽明学の開祖といわれる中江藤樹の高弟で、岡山藩主池田光政に仕えた陽明学者である。また、鈴木は河村の蔵書から「王龍溪全書」を「非常ニ喜ンデ持ツテ行カレタ事モアツタ」という。王龍溪は王陽明の高弟である。⁽⁶¹⁾

なお、河村善益自身も司法省法学校時代に熱烈な王陽明崇拜者であつたことは注目に値する。河村は「私は其頃学科の余暇には、好んで王陽明の書に読み耽つて居つた」と述べている。⁽⁶²⁾

(4) 小倉正恒

小倉正恒の場合は、禅や陽明学からの影響に加えて、石門心学や禪教にも傾倒し、思想的には「総合主義」の立場をとつた。⁽⁶³⁾彼は「世界史上の大転換とアジア文化」という遺稿のなかで「東洋の精神文化の学問のうちでも、もつとも大きな部分を占めているのは心の学問、心学」であるとし、西洋文化には意識とか情念についての研究はあるが「心の本体はどういうものであるかという研究」はない、と述べている。⁽⁶⁴⁾そして、「心」と「意識ないし情念」との

違いを、禅における悟りの境地を例にひいて説明し、心の本質とは「本来無一物一空」であると断じた。小倉によれば、心は「本来無一物」であるからこそすべてのものを受け入れることができる。彼の理解では、中江藤樹の陽明学は禅に近いものであるし、石田梅岩の石門心学も「心の研究に重きをおき、禅を取入れ」たものであった。⁽⁶⁵⁾ここに小倉の「思想としての総合主義」に対する高い評価を見ることがができる。

むすびにかえて

昭和八年八月七日、六年間住友につとめたあと東大経済学部助教を経て独立伝道者となった江原万里が死去した。同年十一月七日、大阪住友倶楽部において田中良雄の司会のもとに「故江原万里氏記念会」が開かれた。これには北沢敬二郎、宮島又信他四〇名が出席したという。⁽⁶⁶⁾田中良雄は小倉正恒や西田幾多郎と同郷（旧加賀藩）で、大正四年五月東京帝国大学法学部を卒業、同年六月住友総本店に入社した。江原万里の住友入社はその二か月後である。田中は昭和十六年住友本社常務理事となり、大阪の実業教育の発展に大きく貢献した人物である。⁽⁶⁷⁾田中は学生時代か

ら「真宗の信仰」⁽⁶⁸⁾に基づく求道の生活を怠らなかつた。鈴木馬左也と同様、高い「修養意識」をもつ第一級の文化人であった。田中の著書『職業と人生』⁽⁶⁹⁾は、戦前・戦後を生き続けた古典とも言うべき「人生論」である。ここでは陽明学における「事上錬磨」の思想、禅における三昧の境地、仕事人が育てるという意味の「行の徳」などが説かれている。彼のこの著書にいち早く共鳴したのが、黒崎幸吉や三谷隆正といった内村鑑三門下のキリスト者たちであったことは注目される。⁽⁷⁰⁾ここでは、田中良雄と内村門下生との間の思想的な共鳴盤が用意されていたこと、それを準備したのは、鈴木馬左也のキリスト教観が示しているような、近代住友の経営者の思想的体質であり、田中個人の思想的経験であることを指摘しておきたい。⁽⁷¹⁾

田中良雄は江原万里の雑誌『思想と生活』（昭和六年に『聖書之真理』と改題）の創刊時から物心両面の援助を惜しまず、彼の伝道活動を積極的に支援し続けた。⁽⁷²⁾江原は、田中のみならず、北沢敬二郎・三村起一・河井昇三郎の援助も受けたと述べている。⁽⁷³⁾

江原とこれら住友人との「連帯性」と「共鳴盤」の形成は、江原の「武士道」への強い共感と決して無関係ではな

い。江原は昭和六年十月から翌七年八月にかけて「聖書之真理」に「祖父の書翰 鞍懸寅二郎伝」⁽⁷⁴⁾を發表した。彼は、そのなかで、明治維新が「古来父祖伝来の日本魂」によつて成就されたことを説き、その「古き尊き日本の精神」が失われつつあることを危惧した。そして、「孔孟の教により身を処し、尊皇攘夷で終始した」祖父の生涯は、

江原に、「祖父の歩んだ武士道こそ、真に基督教を接木するに適する台木である事」を「確証」させたと述べている。江原の信仰する無教会主義キリスト教と「武士道精神」との高い親和性および彼らキリスト者の住友入りは、近代住友の経営者の理念や思想が、これまで考えられてきた以上に、歴史的な「重み」をかかえ込んでいることを示すものである。江原や黒崎や矢内原などの卓越したキリスト者の住友入りを、住友の経営者が「有為の人材」を求めると熱心であり、たまたまそれがキリスト者であつたと説明するならば、それは余りにも皮相的かつ単純化の誹りを免れえまい。彼らキリスト者は、禪による修業で鍛え上げた鈴木馬左也の人格と言動のなかに、みずからのキリスト教の信仰に直接訴えかける、強烈な「なにか」を見いだし、「感銘」し「共鳴」したからこそ、「実業家に対する偏

見」を打破し、住友人となつたのである。その「なにか」とは彼の「誠実」(江原)であり、「国家の爲め人類の爲め」(黒崎)の事業経営という強烈な国家意識にほかならなかつた。⁽⁷⁵⁾

黒崎、江原、矢内原の師内村鑑三は、「私は二つのJを愛する、その他を愛さない。一つはイエス(Jesus)、一つは日本(Japan)である」と述べた。彼の愛国心は「日本を正義に於て世界第一の国と成さんと欲する」ところに由来する。高崎藩士であつた父内村金之丞宜之から厳格な儒教教育を受け、陽明学的・武士道的倫理を徹底的に体得した鑑三の愛国心の中核は「国に対する忠誠」であつた。⁽⁷⁶⁾これに対して、「大ニ産業ヲ振興シ商工業ヲ発達セシメテ、邦家ノ為ニ尽シ度イ」と願つた鈴木馬左也にみられるように、近代住友の経営者は、日本を「経済ノ方面」において世界第一の国にしようとした愛国者であつたといえよう。のちに矢内原は住友時代を振り返つて、「生涯中最も記憶せらるべき三年間」⁽⁸⁰⁾であり「多忙にして幸なりし生活」であつたと述べている。このことの歴史的な意味についてはさらに稿を改めて分析する。

〔付記〕 本稿作成のプロセスにおいて瀬岡和子の協力があったことを明記しておく。

七八頁。

(7) 梅井義雄『小倉正恒伝 古田俊之助伝』(東洋書館、昭和二十九年)一七〜一八頁。『小倉正恒』三三三頁をも参照。

(1) 瀬岡誠『近代住友の経営理念』(有斐閣、平成十年)
(2) 企業者活動と創造的パーソナリティに関するE・E・ヘーゲンの理論については瀬岡誠『企業者史学序説』(実教出版、昭和五十五年)第三章を参照。

(8) 宮本又次『大阪文化史論』(文献出版、昭和五十四年)七七〜八一頁。

(3) 旧武士階級出身者内村鑑三の「内面の軌跡」を、幕藩体制崩壊が引き起こした「アイデンティティ喪失の危機」という視点から説明したもので、なだいなだ「内村鑑三に見るアイデンティティの危機」(内村鑑三選集4『世界のなかの日本』岩波書店、平成二年、三三七〜三四五頁)を参照。

(9) 飯島伸子『環境問題の社会史』(有斐閣、平成十二年)二四三頁。なお、同書、三四〜三七頁、六一〜六二頁をも参照。

(4) マージナル・マン(あるいはマージナリティ)と創造的・革新的企業者活動との関係については瀬岡誠『企業者史学序説』とくに第四章を参照。

(5) 新渡戸稲造著、矢内原忠雄訳『武士道』(岩波文庫、昭和十三年)二五頁。

(6) 『幽翁』には「その事業がほんたうに日本のためになる事業であつて、しかも、住友のみの資本を以てしては、到底なし遂げ得ないほどの大事業であるならば、住友は、ちつぽけな自尊心に囚はれないで、何時でも進んで住友自体を放下し、日本中の大資本家と合同し、敢然之を遣りあげてみせようといふ雄渾なる大気魄を、絶えずしつかりと蓄へてゐねばならない」とある(同書、一

(10) 飯島伸子によれば、公害の発生源としての企業が自主的に被害の除去や賠償に努力する傾向の見られなかった戦前において、別子銅山煙害事件における「発生源企業」としての住友の対応は評価されねばならない。飯島伸子『環境社会学のすすめ』(丸善ライブラリー、平成七年)一〇〇〜一二二頁。飯島によれば、戦前の四大鉦害事件(足尾鉦毒事件、別子銅山亜硫酸ガス事件、小坂鉦山亜硫酸ガス事件、日立鉦山亜硫酸ガス事件)のうち、発生源企業自身による問題解決の積極的努力がなされたのは、別子銅山と日立銅山であったという(同書、一二二頁)。また、宮本憲一によれば、足尾銅山鉦毒事件は、「権力によって政治的に処理をした」が、四阪島煙害事件の場合は、初期にはそういう面もあったが「お金と技術をつかつて経済的に処理をした点で、きわめて今日的」であると指摘している。宮本憲一『環境と開発』(岩波書店、平成四年)一二七頁。

(11) 飯島、前掲『環境社会学のすすめ』一二二頁、一三〇

〜一三一頁。飯島はウェーバーのいう「天職義務」のエートスとは何かについて、またそうしたエートスを身に付けた個人とは具体的にどのような人間なのかについて明確な説明はされていないように思われる。伊庭が、住友における「天職義務のエートス身につけた」経営者であったからこそ、自社努力による公害問題解決という選択が可能になったと、暗示しているように解釈することもできる。大塚久雄の解説によると、ウェーバーは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において、近代資本主義（西洋に独自の近代の合理的経営的資本主義）（大塚訳、七二頁）の精神的起源を「禁欲的プロテスタンティズム」に求めた。彼によれば近代資本主義の精神とは、それ以前には「反道徳的なもの」でしかなかった営利獲得行為を、人間に義務づけられた自己目的すなわち「使命たる職業」とみなし、「正当な利潤を天職 (Beruf) として組織的かつ合理的に追求するという心情」にほかならない。そして「世俗の職業は神の召命であり、われわれが現世において果たすべく神から与えられた使命なのだ」という「天職義務」の思想は、実は「長い間の宗教教育の結果として生まれてくるもの」であり、歴史的にはカルヴィニストに代表される「禁欲的プロテスタン」の宗教意識から生じたものであった。大塚久雄「訳者解説」（マックス・ウェーバー著・大塚久雄訳『プロテスタンティズムの倫理と資本主

義の精神」岩波文庫、平成元年）三七三〜四一二頁を参照。なお、マックス・ウェーバーがその古典的名著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において展開した近代資本主義の精神的起源に関する命題を企業者史の視点から解説したものとして、瀬岡誠『企業者史学序説』一〇六〜一二二頁を参照。

(12) マックス・ウェーバー著、大塚久雄、前掲訳書、三九五頁。

(13) 鈴木馬左也が明治四十三年に柴垣前定に宛てた手紙による。「鈴木馬左也」三一六頁。鈴木はキリスト教の学校同志社の卒業式で話をすることを快諾している。なお、柴垣については、同書、六九七〜七〇〇頁を参照。

(14) 川田順によると、「久保は日本人としてドストエフスキを知った最初の人であり、住友を去ったのちは東京帝大総長やドイツ大使におされたこともある」といわれる。川田順『住友回想記』（中央公論社、昭和二十六年）二七〜二八頁。

(15) 『住友春翠』四六六頁。山下芳太郎については、瀬岡誠『報徳会と財閥経営者』（『京都学園大学論集』第十巻第二号、昭和五十七年二月）を参照。

(16) 黒崎幸吉は住友入りの際、鈴木馬左也に「私は内村先生の許でキリスト教の信仰に入ったのだから実業界などに到底向かない」と言ったところ、鈴木は「そんなことはない、われわれの同僚にも久保無二雄というキリスト者がいる」と答えたという。『黒崎幸吉著作集』第五巻

(新教出版社、昭和四十八年) 三五七頁。また、黒崎が大正八年四月、新居浜の別子鉱業所から住友製鋼所副支配人として大阪に転任したとき、同所の所長が山下芳太郎であった。黒崎によれば、山下はキリスト者でYMC Aにも関係しており、「私を切に所望した」ということである。同書、三三三頁。

(17) 『住友春翠』七二八頁。

(18) 『鈴木馬左也』三一六頁。

(19) 『鈴木馬左也』における草鹿丁卯次郎の追想文、五〇一〜五〇二頁より引用。

(20) 江原万里「聖書の現代経済観」(『江原万里全集』第一巻、岩波書店、昭和四十四年所収) 九四頁。

(21) 『住友春翠』には、「総本店経理課にゐた黒崎幸吉の為人を見て、之を麻布別邸勤務とし、寛一の付け人とした」とある。同書、五二五頁。また、黒崎は、当時暁星中学三年生であった寛一の「補導係」として急に大阪の住友総本店から東京に転任になった。大正元年八月末から同五年十二月の別子鉱業所への転任までのおよそ四年余りは「私の全時間と全精神とを寛一君のために使用せざるを得ない状態となった」と述べている(黒崎幸吉、前掲書、三七三頁)。また、黒崎にとつて寛一の付き人としての生活は「全く神経をすり減らす苦勞」であったという(同、三九二頁)。黒崎は、別子鉱業所に転任するさい、すでに廃嫡になっていた寛一の「信仰的指導」を、官吏を辞し内村鑑三の助手として伝道に従事してい

た親友藤井武に託している(同、三七四頁)。

(22)

内村の「無教会」とは「既成の教会の外で信仰生活をする者の集り」という意味であり、教会を無視するという意味ではない。岩隈直『無教会主義とは何か』(山本書店、昭和四十二年)一〇頁。つまり、「人は教会員にならなくても、キリスト信者であり得るということ」であり、この思想は、教会の伝統に対する「革命的な大胆極まる挑戦」であった。矢内原忠雄「日本の思想史上における内村鑑三の地位」(鈴木俊郎編『内村鑑三と現代』岩波書店、昭和三十六年、一〜一八頁)一五頁。また、岩隈によれば、内村の無教会主義は「真に日本を愛する、独立心旺盛な日本人の、神とその福音以外の何者も絶対視しない精神」から生まれた。それは日本の精神的伝統の上に立脚しているので、「日本的キリスト教」と呼ばれる。内村は、日本人のキリスト教は武士道に接木された基督教でなくてはならないと主張した(岩隈、前掲書、七二〜八九頁)。「神に対する忠誠の精神と愛国心とが結合した」(岩隈、同書、一五二頁)内村の無教会主義は、一時住友人となった黒崎幸吉、江原万里、矢内原忠雄に受け継がれた。矢内原忠雄は「基督教の信仰によって日本を愛した愛国者、これが内村鑑三の真の姿であります」と書いている。矢内原伊作『矢内原忠雄伝』(みすず書房、平成十年)四〇八頁。なお、昭和五年五月に行われた「第一回内村鑑三記念キリスト教講演会」では、黒崎幸吉、矢内原忠雄、藤井武、塚本虎二など七

名が講演した。七名はすべて学生時代から内村の門に入った人々である。矢内原伊作、同書、同頁。黒崎幸吉と矢内原忠雄は昭和三十六年三月に行われた「内村鑑三先生生誕百年記念キリスト教講演会」の講師もつとめている。鈴木俊郎編、前掲書、一四七頁。

- (23) 結成当初の柏会は、塚本虎二によれば、「全くの俗人会であって」、信仰的集団とはいえなかったようだが、のちにはその性格を強め、また師の内村自身が信仰的態度を要求するようになった。矢内原伊作、前掲書、二九〇頁。また、柏会は大正五年十月に解散し、「エマオ会」が結成された。関根正雄「内村鑑三」(清水書院、昭和四十二年)一一五―一一六頁。なお、矢内原忠雄と同時に内村門下に入った南原繁や坂田祐らは明治四十五年一月「白雨会」を結成した。矢内原は先輩の川西実三らと以前から親しかった関係で「柏会」に入会したという。矢内原伊作、前掲書、一九九頁、および関根正雄、前掲書、一一六頁。白雨会のメンバーには、南原繁(東大生、のち東大総長)、坂田祐(一高生、のち関東学院院長)、松本実三(一高)、高谷道男(のちヘボンの研究家)、鈴木錠之助(慶応)、佐藤禎一(高商)などがいた。小原信「内村鑑三の生涯」(PHP研究所、平成四年)二九一頁。
- (24) 矢内原伊作、前掲書、二八九頁。小原信、前掲書、二九一頁。
- (25) 矢内原伊作、同書、一九九、二九〇頁。

(26) 矢内原忠雄「私は如何にして基督信者となったか」(『矢内原忠雄全集』第二六卷)一三九頁。これは、矢内原伊作、前掲書、二九頁に引用されている。なお、忠雄は父憲一のことを「儒者の風骨をつたふるもの」とも述べている(矢内原伊作、同書、三九頁)。

- (27) 『矢内原忠雄全集』第二四卷、四八八頁。矢内原伊作、前掲書、一九三頁。
- (28) 矢内原伊作、同書、一九八頁。
- (29) 南原繁・大内兵衛・黒崎幸吉・楊井克巳・大塚久雄「矢内原忠雄——信仰・学問・生涯」(岩波書店、昭和四十三年)における「略年譜」による。なお、矢内原は別子鉱業所に勤務中の大正八年夏に、東京帝国大学経済学部から新渡戸稲造の植民政策講座をついでくれるよう招聘を受けた。一度は断り、何度も躊躇したが熟慮ののち承諾したという(矢内原伊作、前掲書、三四三頁)。
- (30) 無教会史研究会編著『日本キリスト教史双書 無教会史Ⅰ 第一期生成の時代』(新教出版社、平成三年)一六七―一六八頁。
- (31) 無教会史研究会編著、前掲『無教会史Ⅰ』の巻末に収録された「柏木教友名簿」(大正六年)二五八―二六二頁による。これは一枚刷りの名簿で一三〇名(男一〇四名、女二六名)が記載されている。名簿の末尾に「本名簿にはカード御記入分のみを印刷仕候」とある。同書、二六二頁。
- (32) 大久保久三「鈴木さんの思出」(『鈴木馬左也』五八六

（五八七頁）、同「小倉さんを偲びて」（『小倉正恒』七五七～七五九頁）を参照。

（33）『黒崎幸吉著作集』第五卷、四三三頁。

（34）『住友春翠』五六八頁。

（35）教友会とは、『聖書之研究』読者の「友誼的団体」として内村鑑三の呼びかけにより結成された全国組織である。関根正雄、前掲書、一一二～一一四頁。

（36）『住友春翠』五六八～五六九頁。

（37）大正九年三月、住友寛一の結婚問題の是非をめぐる、それに賛成した藤井武と、反対した内村および黒崎の間で、トラブルが発生した。内村と黒崎は連名で反対の宣言書を書き、それを読んだ藤井は激怒、黒崎とは絶交し、師の内村のもとを去った。ただし、大正十一年一月には内村および黒崎との和解が成立している（無教会史研究会編著、前掲書、一七二～一七五頁）。

（38）住友における無刀流グループについては、瀬岡誠「近代住友の経営理念」二二七～二三九頁を参照。なお、無刀流第四代草加龍之介は、鈴木馬左也の腹心といわれた草鹿丁卯次郎の息子である。

（39）『黒崎幸吉著作集』第五卷、三三二頁。

（40）矢内原伊作、前掲書、三〇五、三〇八頁。なお、文中の「松本」を特定することは今のところできない。ただし、前掲「柏木教友名簿」に「北米 紐育 住友銀行員 松本実三」という名前が見られることを指摘しておきたい。さらに、「白雨会」のメンバーのなかに、松本実三

の名が見える（関根正雄、前掲書、一一六頁）。小原信によると、松本実三は「一高生」である（小原信、前掲書、二九一頁）。白雨会については、注（23）を参照。

（41）矢内原伊作、前掲書、三二四頁。

（42）矢内原伊作、同書、三一六頁。

（43）藤井武の生家は金沢の士族であった。一高・東大では矢内原忠雄の六年先輩で柏会のメンバーであった。大学卒業後内務省にはいるが、大正四年末に官吏を辞め、内村鑑三の助手となり、内村の主宰する『聖書之研究』に寄稿していた。矢内原伊作、前掲書、三一九～三二〇頁。

（44）このときの同所所長が先に述べたキリスト者山下芳太郎であり、山下は黒崎を引き留めようと、辞職を一年延期することなどを提案したが、「辞職して伝道せよ」という「神の御声」を聞いた黒崎の決心は変わらなかつた。黒崎によれば、山下所長の「私が君のことを考えて親切の心からこれだけ言っても従わないのなら、君は僕をサタンと思っているのか」とのキリスト者らしい問いかけに、黒崎は「神の言葉を取り消させようとするのはサタンに相違ない」と思い、「サタンと思います」と答えることができたという。そのように答えることができたのは「神が私を守って下さった」からであると回想している。『黒崎幸吉著作集』第五卷、三九〇～三九二頁。なお、江原万里と大久保久三は黒崎のために送別会を開き、その時黒崎は「奴隷の生涯」について語った。同

書、三九二頁。それはのちに黒崎幸吉「奴隸の生涯」(一粒社、昭和六年)として出版された。黒崎の住友退社の理由は同書、三〇一頁に詳しい。

- (45) 以下に述べる江原の経歴は、『江原万里全集』第三卷(岩波書店、昭和四十五年)の「付録」に収録された「江原万里年譜」による。なお、母方の祖父の鞍懸寅二郎(赤穂藩出身)は、江戸で塩谷岩陰の塾に学び、水戸の会沢正志斎の門に入った(『日本人名事典』四五七頁)。赤穂藩を追放されてのち、津山藩の藩儒となり、維新後の明治二年には同藩の権大参事をつとめた。明治四年に民部省に出仕したが、廃藩置県に伴う民心動揺を鎮めるため帰郷したおり、銃撃され死亡した。江原万里「祖父の書翰―鞍懸寅二郎伝」(『聖書之真理』第四十八〜五十八号、昭和六年十月〜同七年八月、『江原万里全集』第二卷、岩波書店、昭和四十五年、六一七〜六六八頁所収)。江原は「今猶私に若し身を捨てて国に尽さうとする一片の赤心が存するならば、それは確かに祖父の遺産である」と述べ、この祖父の生き方から大きな影響を受けたことを告白している(同書、六一九頁)。
- (46) 矢作栄蔵と新渡戸稲造は、中央報徳会の活動を通じて、鈴木馬左也や北条時敬をはじめとする十四会系準拠集團のメンバーたちと交流があった(瀬岡誠「近代住友の経営理念」一二八〜一三〇頁)。「柏会」のメンバーであった川西実三は、東大経済学部の矢作栄蔵教授と総理事鈴木馬左也は親交があり、「矢作先生に鈴木さんが頼

んでおった。いい学生があったらわしのほうへ世話をしてくれということだった。だから、矢内原君だけでなしに黒崎幸吉など何人かが住友に入っている」と証言している。これは、矢内原伊作、川西実三、三谷隆信の三名が「わが友 わが父」と題して対談したなかでの発言である。矢内原伊作、前掲書、四五四頁。

- (47) 江原万里、前掲「聖書の現代経済観」九四〜九五頁。
- (48) 江原はのちに、住友入社の理由を次のように述べた。「私は最初官吏になり、実業家となる事をきらったが、それ以上に伝道師になる事を心からきらった。私が学校卒業の際何になっても官吏と実業家とはならないときめたに拘はらず、大阪の住友に入ったのは、実はうかうかして居ると伝道師になりはしなかつたかと思われたからであつた。住友をやめて帝大の助教、すなわち官吏になつたのも同様の理由からであつた」(『江原万里全集』第三卷、六〇三頁)。江原は、「餓死する覚悟で伝道しなければ真の伝道師ではない」と考えていた(同書、六〇六〜六〇七頁)。
- (49) 『江原万里全集』第三卷、六〇四頁。なお、一高以来の友人河合栄治郎の「人としての江原君」(同書、月報三、昭和四十五年五月、三〜六頁)をも参照。
- (50) 『日本人名事典』二〇五頁
- (51) 逆照射の方法については、瀬岡誠「西田幾多郎の準拠集團」(『同志社商学』第五〇巻、第五・六号、平成十一年三月)を参照。

(52) 伊庭貞剛、鈴木馬左也、小倉正恒と「禪」との関わりについては、瀬岡誠『近代住友の経営理念』を参照。

(53) 『小倉正恒』五二〇頁。

(54) 荒木見悟『仏教と陽明学』（第三文明社、レグルス文庫、昭和五十四年）四四頁。

(55) 吉田公平『日本における陽明学』（ペリカン社、平成十一年）一六頁。

(56) 吉田公平『陽明学が問いかけるもの』（研文出版、平成十二年）一二三〜一二六頁。同『日本における陽明学』一六頁。吉田によれば、この意味では、朱子学も同様である。しかし、日本においては朱子学ではなく陽明学が、実践を強調した倫理学、政治哲学として評価され、思想運動を展開した。その理由として、陽明学が朱子学よりも徹底的に性善説の原理主義を説いていること、陽明学が「知行合一説」を説いていること、さらに軍人官僚として活躍した王陽明自身の経歴があげられる。吉田『日本における陽明学』一二〜一八頁。

(57) 『幽翁』二四頁、三七七頁。

(58) 末岡照啓「一九世紀末、別子銅山の環境対策に挑んだ伊庭貞剛」（『住友史料館報』第三一号、平成十二年七月）を参照。

(59) 神山誠『伊庭貞剛』（日月社、昭和三十五年）、一七七頁。

(60) 『鈴木馬左也』五六一頁。

(61) 吉田公平によれば、日本における陽明学の開祖といわ

れる中江藤樹は、王陽明のみならず王龍溪の思想からも大きな影響を受けて彼独自の心性論を展開した。吉田公平、前掲『日本における陽明学』六二頁。

(62) 和田文次郎編・発行『男爵本田政以君伝』（葵園会、大正十三年）三七頁。

(63) この点については、瀬岡誠『近代住友の経営理念』第五章を参照。

(64) 小倉正恒『世界史上の大転換とアジア文化』昭和三十六年八月、『雅友』第五十三号、九月同第五十四号（『小倉正恒』五一〜五二五頁）五一八頁。

(65) 小倉正恒、同論文、五二〇頁。

(66) 『江原万里全集』第三卷、六三八頁。

(67) 西田幾多郎の「すべての本が焼けても、臨済録と歎異抄さえ残っておればいい」という有名な言葉は西田が田中に直接語ったものといわれる。西田は田中の四高時代の恩師であり、二人の交流はその後も維持された。西田は田中の人物を高く評価しており、長女を彼の妻にしようと考えたほどであった。瀬岡誠『近代住友の経営理念』二四三頁。

(68) 田中は学生時代に小学生二人を助けるため大事故にあつたが、浄土真宗の信仰により立ち直り、やがて住友入りする。津田久によれば、田中は当時は回顧して「東京から赴任の途中、まず伊勢神宮に詣でて、自分の一生を住友にささげようと私かに決心した。さらに京都に立ち寄り、親鸞聖人の大谷御廟にお詣りして、私はいよいよ

銅臭紛々たる巷にはいますが、一生あなたの御足あとを辿らせていただきます、と深く心に念じた」と述べた、という。津田久「田中良雄さんの思い出」(田中良雄『職業と人生』ごま書房、平成二年、二〇八〜二一八頁)二一四頁。

(69) 同書は、もともと田中が住友合資会社の人事部長時代の昭和十一年五月、協調会大阪支部興民学院成人教育講座で行った講演の速記録をまとめたものである

(70) 田中良雄『私の人生観』(四季社、昭和二十九年)二八二頁。

(71) 瀬岡誠『財閥経営者とキリスト教社会事業家Ⅱ』(国際連合大学『人間と社会の開発プログラム研究報告書』HSDRIE-85J/UNUP-486、昭和五十八年)四〜五頁。

(72) 江原によれば、この雑誌の発刊を最初に相談したのが田中良雄であり、彼は「心からなる賛同」を示し、「わざわざ大阪から上京し、私を訪ね毎月百部購求を約し」てくれたという。『江原万里全集』第三卷、六〇一頁。

江原は、田中を「私の最も敬愛する親友の一人」といい、田中からの書翰の一部を『親しき友よりの愛信』として『思想と生活』(昭和五年十月)に掲載した。同書、六八九頁。田中良雄への感謝は、たとえば同書、五八五、五九一〜五九二頁にも述べられている。

(73) 『江原万里全集』第三卷、六〇二頁。なお、江原は北沢敬二郎の仕事(経理課主計係)を引き継ぐかたちで住友総本店に入社した。北沢敬二郎「江原君の追憶」

(『江原万里全集』第二卷、「月報」昭和四十五年)一頁。

(74) 『江原万里全集』第二卷、六一七〜六六八頁。引用は、六六三、六六四、六六六頁。

(75) 江原万里「聖書の現代経済観」(『江原万里全集』第一卷)九二〜九八頁、および黒崎幸吉「思い出」(『鈴木馬左也』六一〜六一三頁)を参照。

(76) 内村鑑三「二つのJ」(『内村鑑三選集4 世界のなかの日本』岩波書店、平成二年、三〇六〜三〇七頁)三〇六頁。

(77) 内村鑑三「私の愛国心に就いて」(『内村鑑三選集4』二九八〜二九九頁)二九九頁。

(78) 関根正雄、前掲書、一三〜一四頁。

(79) 『鈴木馬左也』所収の河村善益の追想による(同書、五六一頁)。

(80) 矢内原伊作、前掲書、三三二頁。
(せおか まこと・大阪学院大学国際学部教授)